

称号及び氏名	博士（人間科学）	守屋 治代
学位授与の日付	平成28年3月31日	
論文名	「看護人間学」の構想と基盤原理の探究 —F. ナイチンゲール看護論を再考して—	
論文審査委員	主査	吉田 敦彦
	副査	細見 和之
	副査	浅井 美智子

要旨

19世紀にF. ナイチンゲールによって創始された看護学は、どこへ向かおうとしているのか。どこへ向かうべきだろうか。本研究は、このような問題意識から出発している。この問いは、単に看護学の内から応答できる範囲を超えており、本研究は看護を人間学的に考察する立場からこの問いにアプローチした。

20世紀以降の看護学は、近代自然科学を武器に発展した西洋医学を横に見ながら、そこからの自律を意識しつつ看護科学としてその専門性を主張してきた。その「科学化」や「専門化」は、人間の生命や生にどのように寄与してきたのだろうか。行き過ぎた「科学化」や「専門化」は、人間の生死をその専門性のなかに囲い込む危険さえ孕んでいるのではないか、という疑問が浮かぶ。

そこで本研究は、19世紀にナイチンゲールが看護学を創始した地平に立ち還り、「看護」をもう一度「人間」やさらに「人間」がそこにおいて生きている「自然」との関係において根本的に把握し直す作業を行った。つまり、そもそも人間にとって看護とは何なのか、どのようにあることが人間の生命や生にとって意味ある看護となりうるのか、という問題に取り組むべく、「看護人間学」という新たな領域を構想した。それは、ナイチンゲール看護論を再考することを通して、「自然と人間と看護」の根本的関係を考察し、その地平から看護を捉え直したということになる。

そのための方法として、ナイチンゲール看護論のもつ自然観・科学観・看護者論・認識方法・実践者論の理解をその核心において深めるために、H. ヨーナスの生命の哲学、M. ブーバー哲学の人間存在理解、ゲーテ＝シュタイナーの認識論、木村素衛教育哲学の実践主体論を参照した。従って本研究は、ナイチンゲール看護思想研究としての意義をも有している。

第I部では、「看護人間学」構想の意義と基本的立場を3つの章にわたって述べた。まず第1章では、20世紀以降に開発された看護理論がもつ特徴的な3類型の身体観を通して、看護学が、全体論パラダイムをもつ人間科学の枠組みのなかで、脱身体化や神秘的傾向をも運びながら多次元的な身体を理解を試み、その専門性を模索してきたことを確認した。しかし、生きている身体はさらにその根底で生命に支えられているとすれば、身体観はさ

らに生命観にまで掘り下げられなければならない、看護学がそのような生命観を含む自然理解の立場を自らの科学性のうちどのように自覚しているのかが問われることを述べた。

そこで第2章では、看護学の源泉としてのナイチンゲール看護論に戻り、その宗教観・自然観・科学観を検討した。その際、精神（人間）と身体（自然）を高次に統合する生命の次元をもつヨナーナの「生命の哲学」を参照した。ナイチンゲール看護論は、その独特の宗教観に基づく根源的自然観をもっており、そこには近代自然科学のもつ自然と人間の断絶はみられない。人間も含め全ての生命あるものが「根源的自然」の働きのもとにあり、ナイチンゲールはそこから看護の本質を捉えようとしていた。このような「自然と人間と看護」の根本的連関を問い得るところに、ナイチンゲール看護論の核心的意義を見出した。

第3章では、第2章で明らかにしたナイチンゲール看護論の特質を基盤にした「看護人間学」を構想する意義を考察した。その際、O. F. ボルノーによる教育人間学の方法論を参照し、「自然と人間と看護」の根本的連関に基づく「看護人間学」の基本的立場を示した。まず、「宗教としての看護」と「科学としての看護」を止揚したものとしての「人間学としての看護」の立場から、人間が世界（自然）に対してもつ基本的な態度として、それぞれ「一体化」・「対象化」・「主体化」の3つの観点を抽出した。次に、「自然と人間と看護」の根本的連関をこの3つの観点から明らかにした。ただし、「根源的自然」は常に人間を超えて、かつ人間の内で働いており、看護を主導する原理である。この原理を前提として、看護を特に教育と差異化することによって明らかになった「自然と人間と看護」の根本的連関とは、次のようなことである。すなわち、「一体化」していた自然を「対象化」して自然から離れた人間は、病の体験を契機に、「主体的」に自然とのつながりを選び取り、その関係を修復し生き直す。そして看護は、人間が自然との新たな関係を築くことを媒介することにその本質がある。

続く第II部では、ナイチンゲール看護論を存在論的位相・認識論的位相・実践論的位相において再考することにより、第I部で構想した「看護人間学」を支える基本原理を検討した。まず第4章では、看護する相手である目の前のその人に対して、どう存在することが看護者の専門性といえるのかを示した。ここでは、ナイチンゲールが看護専門職に求める“calling”（召命）と“election”（選任）の自覚の重要性について、人間存在が世界に対して根元的にもつ「二重性」に関するブーバー哲学を参照し考察した。まず人間の生の根本は、〈われ-それ〉関係と〈われ-なんじ〉関係を往還して生きるところにある。そのうえで、〈なんじ〉からの呼びかけを主体的に選び取り応答する看護行為の能動性と、その人の存在全体を受けとめようとする受動性の動的往還運動の持続のうちに、看護実践において日常性の只中に非日常性が現れる様相を捉えた。看護の専門性を生きるということは、〈われ-なんじ〉関係を生きることすなわち「関係に巻き込まれること」、および〈われ-それ〉関係を生きることすなわち「距離を保つこと」、この二重性を引き受けることとして捉えられた。

第5章では、看護者は、看護が協働する自然の働きをどのように認識するのかを示した。ここでは、ナイチンゲールが求めた「自然を真に認識し、自分を導く思考に従って行為する」という意味について、ゲーテ＝シュタイナーによる自然の本質を対象の内側から把握しようとする認識論を参照した。それは、あくまで自然現象に即して知覚し、かつその感知されたものを心的イメージにおいていきいきと感受するような認識方法である。看護者がこのような認識方法によって、「根源的自然」の働きのもとにある「生命の法則」を感受したとき、それは、看護者の外にありながら看護者自身の内に生成した確かな判断と行為の根拠となる。このような認識に基づいたとき、「根源的自然」と協働する看護とは、自然

の創造の働きを人間の健康や病の営みにおいてより完成させる、(ナイチンゲールがいうところの) 芸術であり科学であると言い得ることを明らかにした。

第 6 章では、実践主体としての看護実践者の意志はどのように生まれ支えられるのかを示した。ここでは、ナイチンゲールが“calling”の内実として求めた「自分自身の内にある最善の理念 (idea) の達成への熱意」について、木村素衛教育哲学を参照して考察した。木村教育哲学は、「形成・表現」としての実践を人間の存在様態の根本的な営みと捉え、その営みの根底に「表現的生命」の働きを見る世界観をもっている。まず、看護実践者の意志が生まれる源泉は、「汝的外」からの呼びかけによって、受動態にある看護実践者の内が限定され、その声を受けとめ自己の根底で観想するところにある。次に、そこに生まれた意志は、看護実践の場において病者と看護者の間を通底する表現的生命の働きによって支えられる。看護実践者の主体性とは、無心に働く一つひとつの営みにおいて、病者の存在そのものと両者を超えた働きによって支えられているものといえる。このように、実践そのもののうちに、看護実践者を支え熟練した看護者へと成長させる動態があることを示した。

以上の 3 つの基盤原理を、第 I 部で導き出した「一体化」・「対象化」・「主体化」の 3 つの観点を用いて考察すれば、次のようになる。存在論的には、〈われ - なんじ〉関係における「一体化」および〈われ - それ〉関係における「対象化」から、両者の二重性を引き受ける「主体化」へ。認識論的には、自然と「一体化」するロマン主義的認識および自然を「対象化」する近代自然科学的認識から、外なる対象を生き生きと感受して「主体化」する認識へ。実践論的には、呼びかけによって他者を受け入れる受動的「一体化」および自己の応答を選び取る「対象化」から、実践意志を自覚する「主体化」へ。このように、看護者の「主体性」とは、「一体化」・「対象化」から「主体化」へとダイナミックに展開する。

以上によって、「看護人間学」の構想の基本的立場とその基盤原理を提示し、看護者一人ひとりの内でみずからの確かな実践意志が生成され支えられる地平を示した。「科学化」や「専門化」が進んだ看護学が今後どこへ向かえばよいのかという冒頭の問いに対して、「看護人間学」は、〈人間が主体的に自然との関係を選び取り修復し、みずからの内の新たな自然性を生き直すことを助ける〉という看護の本質を提示した。「根源的自然」のもとにある「修復と再生」への看護。それを本論におけるひとまずの応答としたい。

なお、「看護人間学」がもつ弱点としては、看護関係の原型である、看護者と被看護者の二者関係を支える社会や共同体との関係、文化の多様性や歴史性と看護の関係を捉える視点が挙げられる。これらを踏まえて包括的な看護学を補完的に構築していくことが今後の課題となる。

学位論文審査結果の要旨

1) 研究テーマが絞り込まれている

本論文は、20世紀の看護諸理論を吟味したうえでF. ナイチンゲールの看護論に照準を定め、従来の看護学領域にはない「看護人間学」という一つの新たな学問分野を構想した第Ⅰ部、その「看護人間学」の基盤原理を、存在論的／認識論的／実践論的の三つの位相に整理して考察した第Ⅱ部の、2部6章で構成している。したがって、ナイチンゲール看護論を基軸とする「看護人間学」構想という主題で本論文は一貫しており、またその構成は無駄なく構造化されている。

2) 論文の方法論が明確である

本論文は、主としてナイチンゲールの看護論と宗教哲学に関する基本テキストを、関連する思想を参照しつつ解説し考察する文献研究を手法としている。その考察にあたっての方法論を明確にするために、第Ⅰ部第3章で、「教育人間学」において洗練されてきた「個別諸現象の人間学的解釈」という方法に論及している。第Ⅱ部ではその方法を用いて、看護実践者でもあった著者の経験を踏まえ、看護という営みにかかわる現象を人間の生の全体連関において解釈する考察を試み、説得力のある議論を展開している。このように、本論文の方法論は、文献研究を主軸にしながらか看護現象の人間学的考察を加えていくという、明確な方法論をもっている。

3) 研究テーマについての先行研究の調査を十分に行っている

まず序章において、ナイチンゲール看護論に関する研究動向を概観し、書誌学的な調査もしたうえで、とくに看護思想についての先行研究は詳細に検討している。「20世紀以降の看護学の動向——身体観に焦点づけた看護理論の系譜」と題された第1章は、先行する主な看護諸理論を概観し、それを類型化して系譜を描き出し、看護学の到達点と課題を明らかにする作業に充てられている。また、「看護人間学」を構想するにあたっては、「人間学」一般に関わる先行研究を踏まえるべきであるが、その点については、必要最低限であるが、「教育人間学」分野における議論を参照している。これらの先行研究レビューを通して、自らが構想する「看護人間学」という領野が未開拓であること、そこに踏み込むにあたってナイチンゲールの看護論および看護思想が潜在的な可能性をもつことを浮き彫りにしている。

4) 研究の素材となる基本文献、資料、調査データを十分に吟味している

本研究においては、ナイチンゲールの二つの基本文献、すなわち看護に関する主著(*Notes on Nursing, What It Is, and What It Is Not*) およびそのバックグラウンドとなる宗教哲学に関する著作(*Suggestions for Thought to Searchers after Religious Truth*) を対象として、たとえば「Nature」「calling / election」といった検証の必要な鍵概念を抽出して丁寧に吟味している。とくに宗教的真理を探究した後者のテキストの解説には、キリスト教から汎神論／万有在神論まで、あるいはアニミズム的な自然信仰から現代の生命論まで、幅広い見識が求められる。その難題に取り組み、第Ⅱ部の三つの章を通して、他の思想を参照しつつ「根源的自然」という中心概念の内容を多角的に明らかにしている。

5) 研究テーマについて、先行研究にはない新しい知見を打ち出している

(1) そもそも人間にとって看護とは何か。日々すでに営まれている看護という事象から見て人間の生はどのように捉え直されるか。こういった、看護科学において今日ほとんど学問的に主題化されることのない、人間と看護に関するメタ理解を研究テーマとし、従来の看護学の専門領域にはなかった「看護人間学」という新しい学問分野を世に問うたのが、本論文の第一の意義である。

(2) 先行研究にはない知見として第二に、本論文における看護人間学的な考察の所産そのものがある。とりわけ、「自然と人間と看護」の根本的連関を、「一体化」・「対象化」・「主体化」という三つの観点から考察し、「宗教としての看護」と「科学としての看護」を止揚したものである「人間学としての看護」という看護理解を提案している点に新しい知見を認めることができる。

(3) 第三に、ナイチンゲール看護思想を対象とする研究としても、先行研究にはない新しい知見を打ち出している。ナイチンゲールの宗教哲学に関する研究は近年になって資料が整備されていくつかの研究が公表されているが、そこにおける「根源的自然 (Nature)」の概念に着目して検証し、それと看護行為との連関を多角的・本格的に議論したのは、本論文が先駆的な研究となっている。

6) その知見を裏付けるための、必要にして十分な議論と実証が展開されている

(1) 「看護人間学」の構想(第Ⅰ部)にあたっては、20世紀の看護理論や看護科学のもつ到達点と限界を踏まえて新領域を位置づける議論、「教育人間学」を参照しつつ人間学的考察の方法論と基本フレームを明確にする議論、そして教育事象と対比して看護に独自の事象がもつ「自然—(動物)—文化—人間—看護」の連関を考察する議論が、十分な厚みをもって為されている。

(2) その構想に基づいて「看護人間学」を展開していく第Ⅱ部では、存在論的／認識論的／実践論的のそれぞれの位相において、範例的な看護事象に関するアクチュアルな記述を交えつつ、メタレベルからの原理的な考察ができています。さらに結章では、その3つの位相(第Ⅱ部の3つの章)を貫く論脈を見出し得ています。すなわち、自然や他者への関わり方としての「一体化」・「対象化」・「主体化」という関係性が看護という営みにおいて如何に矛盾葛藤しつつ統合されていくか、その様相を描き出して結論付けることに成功している。

(3) ナイチンゲール看護論における「根源的自然」を、類縁的な思想における「自然」や「生命」という概念と切り結びながら、そのもつ特質を解明しようとする議論を展開している。この点については、3つの章それぞれにおける考察は一定の水準に達していると認めることができるが、それぞれの考察が並列的にとどまり、各章の議論が最終章の「表現的生命」という概念にまで必然的な連関を伴いながら深まっていく議論は構成できていない。言い換えれば、ナイチンゲールの「根源的自然」概念に立ち還って各章の議論を集約し、より高次の概念を著者が独自に生成する議論にまでは至っていない。しかし、本研究の課題設定の範囲では、以上の考察で十分な説得力をもっている。

なお、著者によっても残された課題として言及されているが、ケア論やジェンダー論の観点から本研究の人間学な考察を相対化して捉え直す議論は十分であるとは言えず、今後の研究に期待するところである。

7) 当該分野の研究領域に新たな地平を切り開く、独創性を備えた論文である

上述のとおり、本論文は、まさに看護学分野に「看護人間学」という未踏の研究領域を新たに開拓しようとするものであり、その構想は明確に打ち出されており、その構想に基

づく必要にして十分な原理的考察が展開されている。

以上の評価を踏まえ、本学位論文審査委員会は全員が一致して、本論文を博士（人間科学）学位の授与に値するものと判断した。

以上